

4. 校舎間 B コース



校舎間 Bコースは、北門から始まります。ダルマガクやアセビ、クスノキを見ながら、渡り廊下をくぐり、3～4号館中庭を抜けていきます。4～5号館の中庭には、和風記念庭園があります。ここの樹を見てまわり、5号館（補習科）から北門へと戻ってくる比較的短いコースです。

左から順に

ネグンドカエデ / 北門のツツジ / ノコンギク / 虹 / イソヒヨドリ / サクラ / 紅葉 / 渡り廊下 / ダルマガク / 冬の校舎 / ミツバウツギ / ミズヒキ

校舎案内図



ダルマギク (キク科 花期/9～11月)

丸い葉やぼつりとした花を達磨と見立てたように思われ、全体に触るとやや粘つく柔らかい長毛が密生しているのがなによりの特徴です。大まかな分布としては九州の西から山口県、飛んで隠岐の海岸に分布しますが、本土側でも山口県から続いて県西部にも少産します。また隠岐では比較的各地で見られます。島根県の本土側でなぜ北上しなかったのか不思議です。県西部や隠岐の海岸で秋の青空に映えるダルマギクの群生がいつまでも見られることを祈っています。



ダルマギク

アセビ (ツツジ科 花期/2下～5月 結実期/9～10月)

高さ1～8mの常緑の小低木で枝先に小さい葉が集まって着きます。前年から形成した蕾は翌年春早く開花し、5月ころまで咲き続けます。花は壺形で白く房となって垂れ下がります。樹全体が有毒で動物は食べません。馬が食べると酔ったようになるというので「馬酔木」と書いてアセビと読ませます。奈良公園や春日山にアセビが多いのは鹿が食べないからです。動物の本能が働くのでしょうか、牛も食べません。また、庭木や盆栽に利用し、葉は煎じて殺虫剤にします。万葉集では「あしび」です。



アセビ

我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり (『万葉集』巻11-1903 作者未詳)

ツワブキ (キク科 花期/10～12月)

本来海岸の岩や崖に生える多年草です。また、庭で見られることも多く、園芸品種も沢山あります。艶のある葉から「艶葉路」とか、厚い葉から「厚葉路」が転じてツワブキとなったといわれます。他の花が咲き終わった秋から冬にかけて石の間などに黄色の花を咲かせるので「石路」と書き、「石路の花(つわのはな)」は俳句の季語になっています。長い花茎を立てて直径5cmほどの頭花を数個～十数個まとめてつけます。頭花は周囲に雌性の舌状花が並び、中心部には両性の管状花が多数あります。葉柄はきやらぶきにして食べます。よく混同されている別種のフキ「路」の花はフキノトウといい、東北～北海道にあるアキタブキは大形で高さ2mにもなるフキの変種です。



ツワブキの花

クスノキ （クスノキ科 花期/5～6月 結実期/10～11月）

クスノキは、「楠」と書いたり、「樟」と書いたりします。葉を1枚とって切って嗅いでみると、樟脳の臭いがします。クスノキは材も樟脳を含み、腐りにくく虫がつきにくいので、タンスや水車、丸木船などに使われました。強心剤のカンフルは樟脳を精製してつくったものです。古くから神社などに植えられ、全国に天然記念物に指定された大木、巨木があります。日本最大は鹿児島県蒲生市の「蒲生の大クス」で幹周りが24.2mもあり、特別天然記念物に指定されています。最近では、公園や街路樹としてよく植えられています。出雲市内医大通り184号線の街路樹はクスノキです。出雲市図書館の前には5本のクスノキが植えられています。昔は、クスノキのことをナンジャモンジャノキと呼んだ時もありました。光沢のある葉には、3本の葉脈があり、その分枝点に小さな膨らみ（写真参照）があり、樟脳成分がないと生きられないと考えられているフシダニというダニが生息しています。



クスノキ



クスノキの葉裏

ヤブツバキ （ツバキ科 花期/2～4月 結実期/9～11月）

ヤブツバキは照葉樹林下の小低木で、たくさんの栽培品種をつくりだしました。園芸種をツバキ、自生のものをヤブツバキもしくはヤマツバキといいます。葉が厚いことから「厚葉木」それがツバキとなったとか、葉に艶があることから「艶葉木」とかいう説があります。「椿」は春に花が咲く木ということで日本で作った和字です。

3～4号館中庭のツバキは野生のものではなく、栽培品種のようです。また、日本海側の多雪地帯にはユキツバキという地面を這うような樹形のツバキがあります。小林幸子の歌う「雪椿」でも有名です。葉柄に毛がある、花が小さい、花卉が開き気味になる等の点でヤブツバキと区別されます。サザンカ（次頁）やワビスケ(p.41)との比較はp.24を見て下さい。万葉集でもヤブツバキは「つばき(椿)」です。



3～4号館の椿

河の上のつらつら椿つらつらに見れど飽かず
巨勢の春野は（「万葉集」巻1-56春日蔵首老）

サザンカ（ツバキ科 花期/10～12月 結実期/翌8～11月）

日本特産の樹木です。ツバキが花のまま、ぽとりと落ちるのに対して、サザンカは花卉がばらばらに散ります。雄しべもツバキのように筒状に合着せず、ばらばらのままです。日本固有の樹木で、原産地は、四国、九州、沖縄です。白色花卉で直径5～8cmの花をつけ、タチカンツバキやフジノミネ等の園芸品種が沢山作られています。また、葉柄や葉裏の葉脈をルーペで観察してみてください。産毛が生えているのがサザンカ、無毛なのがツバキです。初冬を代表する花木です。



サザンカ（栽培品種）

冬の日のあかつき起きに貰いたる山茶花生けて
茶を立てにけり（伊藤左千夫）

ユズリハ（ユズリハ科 花期/5～6月 結実期/10～11月）

暖地で高さ10mになる常緑の高木です。春、枝先に若葉が出ると前年の古い葉がそれに譲るように落葉することから「譲り葉」と命名され、その様子を、親が子を育てて家を譲り代々続いていくように見立てて縁起物とされ、お正月の飾りや庭木として珍重されます。雌雄異株で、雌木には秋に1cm弱の黒褐色楕円形の実がなります。県内には、多雪地型のエゾユズリハ、小形のヒメユズリハも生えています。



ユズリハ

ゆづり葉の見事にたれて霰かな（原石鼎）

コ ラ ム

「イ とリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」

植物で最も短い名前は、「イ」である。イは量表にするイグサのことで、地表に伸びる細い円柱形のは花茎で先端に花序をつけ、さらにその先が苞になっている。逆に、最も長い名前は、「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」で21字もある。海に生える種子植物アマモ（アマモ科、左図）の別名だ。「竜宮の乙姫の元結の切り外し」と書くが、竜宮城の乙姫が結っていた元結いをパリリと切ったその切れっ端がたどり着いてアマモになったという謂われから来ている。2番目に長いのが「シロバナヨウシュチョウセンアサガオ」で17字だ。落語で有名な「^{じゅげむ}寿限無」程ではないが長い名前だ。

コバノミツバツツジ / ダイセンミツバツツジ / ユキグニミツバツツジ
(ツツジ科 花期/4～5月 結実期/9～11月)

春3月から4月にかけて、山には葉の展開と同時に赤紫色のツツジが咲き始めます。このツツジは3枚の葉をもつことから「三葉躑躅」の名前がつきました。ミツバツツジの仲間は全国に数多くあり、区別が難しい植物のグループです。県内にあるミツバツツジは、コバノミツバツツジ、ダイセンミツバツツジ、ユキグニミツバツツジの3つでしょう。

コバノミツバツツジは、「小葉の三葉躑躅」と他のものより葉が小形であることによります。しかし、葉の大きさには、個体差があるため一概には決められません。そこで、葉の裏の毛の状態を見てみましょう。コバノミツバツツジは、葉裏に軟毛という毛が一面にあり、葉柄から主脈にかけて伏毛があります。ダイセンミツバツツジは葉柄から主脈にかけて長軟毛が多く、その他の葉裏は無毛です。ユキグニミツバツツジは葉柄に毛がない点で区別ができます。いずれにしてもよほど見慣れないと見分けがつきません。この3種のミツバツツジを表にしてみましたので、参考にしてみてください。



コバノミツバツツジ



ダイセンミツバツツジ

和名	コバノミツバツツジ	ダイセンミツバツツジ	ユキグニミツバツツジ
花期	最も早い / 頂に1～3個	少し遅い / 頂に1個	最も遅い / 頂に1個
分布	県内全域（隠岐を除く）	県内全域	隠岐
葉裏図			
葉身	3～5cm / 小形	4～7cm / 大形	5～8cm / 大形
葉表	粗毛あり	無毛	無毛
葉裏	有毛ざらつく	無毛	若葉に白毛
中肋	褐色伏毛	長軟毛密生	基部に長軟毛
葉柄	伏毛密生	長軟毛密生	無毛

イヌツゲ （モチノキ科 花期/6～7月 結実期/10～11月）

トウジュロの左側にあります。あまり大きくはならない木のイメージがありますが、山地では6m位にはなるといいます。庭で低く丸く刈り込むのはイヌツゲの園芸品種タマツゲ（マメイヌツゲ、マメツゲ）ですが、イヌツゲはかなり大きくなり、庭木としていろいろな形に刈り込んで楽しめます。ツゲ科のツゲの葉は丸く、果実は楕円形、イヌツゲの葉は楕円形で、果実は球形です。また、北海道と日本海側の多雪地帯には、樹高1m以下の地を這うハイイヌツゲが分布しています。



イヌツゲ

ミツデカエデ （ムクロジ科 花期/4～5月 結実期/9～11月）

4号館側の最初の樹です。樹皮が滑らかという特徴と、「三手楓」の名前のとおり葉は3出複葉です。3枚で1枚の葉です。雄花と雌花があり、雄花にはおしべがありますが、雌花にはおしべはありません。2個の果実は羽根の開きが狭くなっています。

メグスリノキというカエデも3小葉ですが、こちらは全体に毛が多く、葉柄が短いことでミツデカエデと区別します。p.21に記載してあります。



ミツデカエデ

イタヤカエデ類 （ムクロジ科 花期/4～5月 結実期/9～11月）

イタヤカエデというカエデの類は、葉が5～9裂して鋸歯がない特徴を持っているものです。葉がよく茂って板屋根のように雨が漏らないことから「板屋楓」というそうです。

この仲間は、島根県下に4種類あります。隠岐にエゾイタヤ、本土には、オニイタヤとアカイタヤが、稀にエンコウカエデがあります。オニイタヤは葉裏にビロード状に短毛のあるものです。ここの中庭にあるアカイタヤは新芽や葉柄が紅色であり毛のないグループです。万葉集ではもみじは「黄葉」です。



アカイタヤ

春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高門の山 （「万葉集」巻8-157 藤原朝臣八束）

ニッケイ （クスノキ科 花期/5～6月 結実期/11～12月）

クスノキ科クスノキ属の常緑高木で沖縄、徳之島に自生があります。ヤブニッケイ (p.26、p.82) の葉より細長く葉先が尖っていて3脈も先まで繋がっています。この樹の葉を揉んで嗅ぐとシナモンの香りがします。昔、お店屋さんでニッキ玉やニッキ水として売られていたのは、この樹の根から取ったもので、京都銘菓“八つ橋”や“お屠蘇”にも使われています。香辛料のシナモンは、セイロンニッケイの樹皮を乾燥させたもので、肉桂皮や桂皮は、漢方薬としても使われていて昔から重宝されていたものです。



ニッケイ

ダイダイ （ミカン科 花期/5～6月 結実期/11～翌7月）

古い時代に中国から伝わったものです。暖地の庭などでよく栽培されています。果実は秋に橙黄色になりますがそのまま木に残しておくとも年を越して翌春から夏に再び緑色になります。このことから若返って次の代に伝えるという意味からダイダイ「代々」という名前となり縁起が良いとして正月の飾りに使われます。冬、ここを訪れた時、色づいたダイダイの実が一つ落ちてころがっていました。今の時代は誰も取って食べようという人はいないのでしょうか。



ダイダイ

橙のころがるを待つ青畳（桂信子）

ナツツバキ （ツバキ科 花期/6～7月 結実期/10～11月）

夏に花が咲くので「夏椿」、別名をシャラノキ（沙羅の木）、サラノキといいます。「平家物語」冒頭の名文句「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす・・・」の沙羅双樹として古くから寺院や庭に植えられています。しかし、残念ながら、沙羅双樹はインド原産のフタバガキ科の別の植物で、日本では育たない常緑高木です。こちらは高さ40mにもなり、チークと並ぶ有用材です。ナツツバキは、庭木としては5m以下で、花は、白い花卉（5～6cm）の縁に細鋸歯があり、大概一日でしぼみます。花の少ないこの時期に、風情ある茶花として生けられます。



ナツツバキ

いつ咲きし既に散華の夏椿（吉沢欣一）

コデマリ (バラ科 花期/4～5月)

中国原産で庭木や生花材料とします。葉は前半分に鋸歯があり、裏が白く、花は小さな白い花が20個ばかり散房花序^aにつき、径3cm程の毬状になるので「小手毬」といいます。花序は枝に並んでつき、しばしば弓状に垂れ下がり風情があります。

小でまりのまろくまろくと花盛り (玉置朝子)

a 散房花序/側生花の上面が平坦か凸状になる花序。



コデマリ

～子孫繁栄の手段～

コラム

植物にも性がある。雌雄同株の場合は、同じ個体に雄しべと雌しべがあり、雌しべは雄しべから花粉をもらい受精する。自家受粉(自殖)という。しかし、自殖を続けると、言わば近親交配であるため、発育不良や病気、奇形などの弊害が起こりやすく、変異が少なく環境の変化にも一斉に影響を受け絶滅という憂き目も起こりかねない。そこで、植物は、進化の過程で色々な自殖を避ける手段を作り出してきた。その一つが他家受粉である。雌雄別株の場合は、その完全なシステムだが、雌雄同株の場合でも、雌雄で成熟時期をずらして(異熟性という)同花受粉を避ける。雄が先に熟す”雄性先熟”と雌が先に熟す”雌性先熟”とがある。雄性先熟とは、雄しべが先に成熟して花粉を他株にまき散らし、その後雌しべが柱頭を開いて他株からの花粉を受ける方法である。キキョウ、ゲンノショウコ、リンドウ属、ホタルブクロなどがこれに該当する。雌性先熟は、この逆でオオバコ、コブシ、ハクモクレン、シキミなどやイネ科、カヤツリグサ科の植物に多い。植物も子孫繁栄のために、多種多様な戦略を編み出していると言える。なお、異熟性は、性転換とも言われ動物にも見られる。クマノミなどで知られている。



昭和40年の産経新聞より



戦時中の植物園は芋畑となった

4～5号館中庭

4～5号館の中庭には、昭和49年度の卒業記念に作られた和風記念庭園がありました。すでに40年以上が経過し、ヒマラヤシーダーや4号館側のヤマトアオダモ、トウカエデ、5号館側のクロガネモチなどの木々もかなり大きくなりました。他にも、ヨコグラノキやザクロ、キンモクセイ、チシャノキ、ノリウツギが見られます。そして、令和2年(2020年)の創立百周年を機に整備されることとなり、生徒の息抜きの庭として生まれ変わります。



(令和2年8月現在)

ザクロ (ミソハギ科 花期/6月 結実期/9～10月)

ザクロ「石榴」は、小アジア原産でよく庭に植えられています。若枝の先が刺となることがあります。6月頃朱赤色、時に黄色、白、八重咲きの花をつけます。秋に直径5～10 cmの丸い果実が熟すと自然に不規則に割れ、中の種子の外皮が淡紅色で甘酸っぱくて食べられます。



ザクロの花

深裂けの柘榴一粒だにこぼれず(橋本多佳子)

ミヤマガマズミ (レンプクソウ科 花期/5～6月 結実期/9～10月)

山に生える落葉の低木、ミヤマ(深山)といっても普通の山でも見られます。5～6月ころ、白い小さな花が多数集まった花序を付けます。9～10月ころには6～9mmの赤い実が熟して綺麗です。ガマズミ(p.36)は、葉が丸く毛が密生しているので区別点となります。

コバノガマズミは、名前のとおり全体的にひとまわり小さく、葉も細長く、星状毛という毛が一面にあります。果実はミヤマガマズミに似て数が少ないです。



ミヤマガマズミ

チシャノキ (ムラサキ科 花期/6～7月 結実期/10～11月)

チシャノキは、別名カキノキダマシといい、カキノキの葉や幹によく似ています。しかし実際は、ムラサキ科の樹木で、枝先に円錐花序^aをだし、白い花を多数つけます。果実もカキノキよりも小さく4～5mmの球形なので簡単に見分けがつきます。中国地方、四国、九州から亜熱帯地方にかけて生えています。また、エゴノキのことをチシャノキともいいますが、これはエゴノキ科の全く違う樹木です。(p.31 参照)



チシャノキ

a 円錐花序 / ナンテン、ネズミモチ、ノリウツギのように、円錐形の輪郭をなす花序。

キンモクセイ (モクセイ科 花期/10月)

ギンモクセイの変種です。中国原産で、ギンモクセイ同様雌株は渡来していません。もし実がなっている木があったとしたら、それは色が少し薄く、花が少し大きなウスギモクセイです。キンモクセイは「金木犀」で、中国名は丹桂、学名の属名は *Osmanthus* で匂う花という意味です。葉は全縁か先端にごくわずかの鋸歯がある程度で、やや薄く波打った感じの葉です。花は10月に葉腋に束生し、橙黄色で強い香気があります。ギンモクセイやヒイラギモクセイに比べると、多くは植えられていないようです。(p.126 参照)

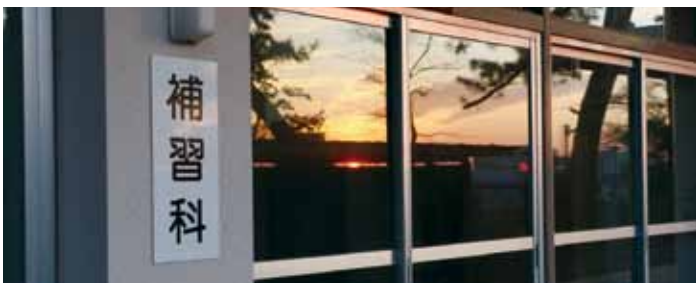


キンモクセイ

金星は低く木犀芬々と (山口誓子)



昭和55年(1980年)の3-4号館



5号館(補習科)/令和元年(2019年)



平成10年(1998年)頃の北門のクスノキ

ノリウツギ (アジサイ科 花期/7～8月)

幹の内皮から製紙用の糊をつくることから「糊空木」の名前がつき、別名も「ノリノキ」といいます。トロロアオイの糊より上質とされ、全国でニレ、ネリ、ノリギ、ノリノキ、トロロ、トロロギ、キニレ、キノリなどと呼ばれています。日当たりのよい山地に普通に生えるアジサイの仲間です。夏に枝先の周囲に少数の装飾花と中心に多数の両性花をつけます。花が円錐花序(円錐形の輪郭をなす花序、右図、ナンテン、ネズミモチ、イネ科など)になる点が他のアジサイ類と異なる点です。ノリウツギの変種に装飾花ばかりになったものがありますが、これはミナズキといえます。



ノリウツギ

トウカエデ (ムクロジ科 花期/4～5月 結実期/9～11月)

ムクロジ科のトウカエデは「唐楓」で、18世紀に中国から長崎に入ってきました。高さ15mくらいになる高木です。新葉の紅色や紅葉又は黄葉がきれいなことと、樹勢が強いことから街路樹として植えられることも多くあります。盆栽としてもよく利用されています。樹皮は暗灰色で薄汚く剥がれ、剪定すると枝先がコブ状になり特異な姿になります。葉が浅く3裂し内側に湾曲します。若い葉は大きく鋸歯も多いが、老木になると全縁に近く写真のような葉になります。



トウカエデ

ヨコグラノキ (クロウメモドキ科 花期/6月 結実期/9～10月)

植物学者の牧野富太郎が高知県の横倉山で見つけたもので「横倉の木」、「横倉」ともいいます。後には東北以南の日本各地、朝鮮、中国中部でも見つかっています。普通、葉は交互に1枚ずつ出ますが、ヨコグラノキの場合は往々にして2枚続いて出て2-2となります。(コクサギ型葉序)。葉の側脈はほぼ平行気味に斜上し、花は地味ですが果実は6～7mmの長楕円形で黄色から橙赤色、熟すと暗赤色になります。県内にも点々と生えていますが、隠岐にはたくさんあって「えいのき」といって、材をくさびや良質の炭の材料に利用されていました。



ヨコグラノキ(①と①、②と②は同じ側から出ている)

キブシ（キブシ科）



タムシバ（モクレン科）

ハナツクバネウツギ
（スイカズラ科）

シャガ（アヤメ科）



ヤマコウバシ（クスノキ科）



ウラシマソウ（サトイモ科）



4-5号館中庭を後にして、5号館を回っていきましょう。ヤブデマリやゴマギ、記念樹のカンボクなどを見ることができます。5号館の正面玄関には大きなネグンドカエデを2株見ることができます。

カンボク（レンプクソウ科 花期/5～7月 結実期/9～月）

高さ6mほどの落葉小高木で、枝や葉はこんもりと茂ります。葉は先が3裂して葉柄の先端部に蜜線が1対あります。梅雨の頃、中心に小さな両性花が、周囲に2～3cmの白い装飾花を配した花序が開花します。9月になると6～9mmの赤く丸い実が熟し、葉が落ちてても残って時に雪が降るとそのコントラストが見事です。カンボクは「肝木」と書きますが、その意味は不明です。島根県では、大東、横田、金城町で自生が知られています。五号館の南側に植えてあります。



カンボクの実

ヤブデマリ（レンブクソウ科 花期/5～7月 結実期/9～10月）

山野の谷川沿いや川沿いに自生し、高さ2～4mになります。6月頃、散形花序^aに両性花をつけ、このまわりに花冠（花卉の総称）が大きくなった装飾花^bをつけます。白くてよく目立ち、不揃いに5深裂した独特の形をしています。ちなみにアジサイ（アジサイ科）では装飾花は萼の変形したものです。葉は厚くて卵形、斜上する葉脈は凹んで目立ちます。夏から秋にかけて果実は赤く熟し、これもまた光沢があり美しく目立ちます。レンブクソウ科のヤブデマリの仲間には、カマズミ類、ムシカリ（オオカメノキ）、オトコヨウゾメ、ゴマギ、サンゴジュなどがあります。名前と分類上の科をよく混同するので注意を要します。



ヤブデマリ

a 散形花序/ 主軸のほぼ一点から同じ長さの小枝が出て、周辺から中心へと咲く花序、シシウドなど。

b 装飾花/ 雄しべや雌しべが退化してなくなり、萼や花びらだけになった花。アジサイ類に多く見られる。写真の白い部分。

マルバアオダモ/ヤマトアオダモ（モクセイ科 花期/4～5月 結実期/9～10月）

マルバアオダモは、トネリコ属の落葉樹で別名トサトネリコといいます。山地に生え、葉は奇数羽状複葉といい、1枚の葉に小葉が5～7と奇数枚つきます。4月頃、白い花卉が目立つ房状の花がびっしりとつき、10月頃、長さ2～3cmの翼果を多数下垂させます。材は硬いので、同じ仲間のアオダモやトネリコと共にバットやテニスラケットに使われたり、建築材や炭材とします。ヤマトアオダモは、4～5号館中庭にあります。



マルバアオダモの花



ヤマトアオダモの花

ゴマギ（レンブクソウ科 花期/4～6月 結実期/8～10月）

ゴマギもヤブデマ리에近縁のレンブクソウ科の植物です。高さ7m程の落葉する高木で、葉がこんもりとよく茂り、大きな葉は凹んだ葉脈が明瞭で葉の端まで達しています。その葉や枝を揉んでみるとゴマの臭いがするので「胡麻木」といいます。花は4～6月に咲き、8月から10月にかけて実は赤くなり熟すと黒くなります。



ゴマギ

ネグンドカエデ (ムクロジ科 花期/3~4月 結実期/9~10月)

北米東部原産で1882年に渡来しました。寒いところを好む樹で北海道にはたくさん植えられています。平田先生お手植えの木の1つと思われます。奇数羽状の複葉で3~5(稀に7)枚の小葉からなり、トネリコ(マルバアオダモを参照)の葉に似ているというのでトネリコバナカエデともいいます。カエデの仲間では一風変わった葉です。ネグンドカエデは、学名の *Acer negundo* L. の *negundo*(発見者の人名) からきています。4月に葉よりも早く黄緑の花が垂れ下がって咲きます。雌雄異株です。9月頃、雌株にできる果実は2個の種子の開きが広いもののカエデそっくりの実です。補習科の昇降口とその正面に2株植わっています。



ネグンドカエデ

『松の木は残った』

北門のクロマツ(次項の写真)は、幾度も伐採の危機がありました。5号館が建てられる時、北門を広げる時、2006年に完成した校舎全面改築の時、その都度、出入りに邪魔になるというので、切られる運命にありました。しかし、山の学校を懐かしむOBや学校関係者の説得によって今もここに生き続けています。かつて師範学校から新制高校の初期まではこの写真のような松林が校地の周囲を囲むように生えていて、登下校の生徒を見守っていたものです。懐かしく思い出す卒業生も多いことでしょう。現在、道路側に並んでいる松林は、当時の松の生き残りかも知れません。女子師範学校や出雲高校の生徒達を100年間見続けてきた松です。



昭和26年(1951年)頃の登校路の坂道。男子はマントでした。

昭和55年
(1980年)
頃の北門と
クロマツ。奥
にはクスノ
キも見える
→



平成10年(1998年)頃の北門のクロマツ

県内の海岸全域には天然のクロマツ「黒松」が見られますが、塩害や強風に強いので各地で防風林として植栽されています。特に三大松原といわれる「三保の松原」（静岡市）、「虹の松原」（佐賀県唐津市）、「気比の松原」（福井県敦賀市）は有名で、特に「三保の松原」は2013年に世界文化遺産「富士山・信仰の対象と芸術の源泉」の構成遺産に登録されています。

出雲市でも大社海岸から長浜海岸と続く海岸部やその背部の砂丘である長浜で、防風林や砂防林として広く植栽されているのを目にすることができます。さらに、出雲のクロマツといえば「築地松」でしょう。日本海からの季節風を防ぐために家の周囲をクロマツで囲った風景は出雲が世界に誇れる景観です。そのため、出雲市の市の木は黒松（クロマツ）となっています。

一方、アカマツ「赤松」は丘陵地から山地の斜面や尾根を中心に群生して生育します。これも人間の生活と密接に関わっています。原始時代の出雲の丘陵地はシイ、カシ、タブなどの照葉樹林が広く見られましたが、燃料の薪や建築資材に使われるようになり、栄養分が少なく明るい場所を好むアカマツが広がりました。この

アカマツは建築資材や薪、松葉は焚き付けとして長らく利用されてきました。しかし、プロパンガスの普及や安い外材の輸入等で放置され、おまけにマツクイムシの蔓延で今や県内のアカマツ林は山間部に残されている程度でほとんど壊滅状態です。そのため、松茸が身近に生えているキノコだったことなど今では信じられないものとなりました。

出雲の山はすっかり変わってしまいました。出雲北山のアカマツ林もほとんど無くなっています。また、立久恵峡は30年前までは岩にアカマツが点在する景観だったのがカシなどに覆われてしまっています。そして、久微園のアカマツも枯れ、照葉樹林となっています。このような中で、人の手が加わっていたことで生活できていた里山のキキョウなどの植物やギフチョウなどの昆虫が人知れず絶滅しています。出雲の丘陵地は再び原始の照葉樹林へと帰ろうとしています。



北門のクロマツ/ 令和元年(2019年)

種名	クロマツ	アカマツ
分布	沿岸部	主に山地。尾根筋や岩山など
樹形	円錐形から扇形に、独特な樹形	円錐形、老樹になると扁平に
樹皮	皮目は荒く深く、黒っぽい	樹皮は薄く皮目も浅く、赤っぽい
葉	太く、長く、堅くて触ると痛い	柔らかく触ってもあまり痛くない
冬芽	鱗片が灰色で反り返らない	鱗片 ^a は赤褐色で反り返る

a 鱗片 / 冬芽を外側で被っている葉の変形物

ネムノキ (マメ科 花期/6～7月 結実期/9～10月)



ネムノキの花

山野のいたるところに生える落葉の亜高木。夜、対生する小葉が合生して閉じるのでネムリノキ、男女が共に寝ることの意の合歓から「合歓木」など多数の呼び名があります。中国地方の地方名を挙げてみましょう。出雲部、石見東部、広島、山口にかけては、ネムリギ、ネムリ、ネブリ、ネブリギ、ネムージャノキ、ネンブリコ、出雲部、隠岐、鳥取では、カーカ、カーカノキ、カーカー、カカノキ、石見部と山陽一帯では、合歓の変化したコーカン、コーカ、コーカー、コーカノキ、コーカーギ、コーカイ、コーカイギ、コー

カイノキ、変わった名前では岡山のウシノコメ、ウシノママ、ウシノソーメン、ウシノチャノキ、山口ではヒグラシノキ、広島県西部のヤマノコブレなどなど所変われば名も変わります。(広島県、中国地方五県言語地図より)

出雲地方で、カアカ茶とかコウカ茶またはハマ茶とってお茶にする草は、葉がネムノキに似ているので、カーカやコーカから名前がついたと思われますが、これは和名をカワラケツメイ(河原決明)(8～10月、9～11月)といいます。決明はハブ茶にするエビスグサの漢名から来たとされます。また、田んぼや畦などに多く生える雑草のクサネム(8～10月、9～11月)も葉がネムノキに似ていて草だからクサネムと呼ばれますが、カワラケツメイともよく似ていて混同されています。カワラケツメイは茎は中実で毛があり、花が蝶形にならず開いています。一方、クサネムは茎が中空で毛がなく、花は蝶形でしかもさやが種子一個ずつにつき切れ込みがある点で区別できます。

さて、ネムノキに戻って、6月頃、枝先にピンクの花が夕方の薄暮に咲き始めます。次々と咲くので花期は1～2ヶ月と長く楽しめます。ピンクに見えるのは、花弁(極く小さい)ではなく、たくさんの細長い雄しべが淡紅色をしているからです。9月頃、豆果を下垂します。

上皇后美智子さまが高校時代に作詞された「ねむの木の子守歌」を紹介しましょう。楽譜は省略しますが、一度は耳にしたことのある旋律でしょう。

ねむの木の子守歌



美智子上皇后 作詞
山本正美 作曲

ねんねのねむの木 眠りの木
そつとゆすつたその枝に
遠い昔の夜の調べ
ねんねのねむの木 子守歌

薄紅の花の咲く
ねむの木蔭でふと聞いた
小さなささやき ねむの声
ねんねねんねと歌ってた

故里の夜のねむの木は
今日も歌っているでしょか
あの日の夜のささやきを
ねむの木 ねんねの木 子守歌

随想

「久徴会基金」設立の思い ～ 出雲高校創立百周年記念事業の経緯～

島根県立出雲高等学校創立百周年記念事業実行委員会
記念事業部 部長 岩崎 知久

平成 30 年 10 月からスタートした出雲高校百周年記念事業実行委員会は、寄付活動・記念事業・名簿作成等 7 つの部会が作られ、それぞれに取り組みを行ってきました。

私が部長を務めた百周年記念事業部会は、記念事業のテーマづくり、平田植物園・久徴園整備、運動部部室等の修繕、人財育成基金・久徴園整備基金の創設、記念品、記念モニュメント等幅広く事業を提案しその予算や工程・業者選定等に携わってきました。

実行委員会に先立って、平成 29 年 5 月開催の平田植物園・久徴園管理委員会 (15 名 委員長：池淵俊雄久徴会会長) で選出された「原案作成委員会」(7 名 板倉宏文委員長、岩崎知久副委員長) が、一年間かけて平田植物園・久徴園の整備方針を練ってきました。

平成 30 年 11 月開催の第 1 回記念事業部会に、平田植物園・久徴園管理委員会からの平田植物園・久徴園の整備の提案を示し協議に入りました。以下にその提案の概要を紹介します。

テーマ：「次なる百年の人づくり・森づくり」

百年を振り返り、次世代へ伝える・つなぐ久徴スピリッツ

「参加」「理解」「共感」「認識」「展開」のソフト事業

- ・平田植物園・久徴園整備
- ・平田植物園めぐり新訂版の作成、パンフレット作成配布
- ・百年記念式典に併せ久徴園音楽祭、久徴園美術展覧会・写真展覧会・茶会等の開催、整備後の久徴園・平田植物園散策会の開催
- ・出雲高校百年の歩み写真展 (常設展示)

平田植物園・久徴園の継続的な管理運営

ハード面：久徴園内除伐・枝切り、校舎周辺除伐・枝切、東屋の屋根修繕、

山頂広場周辺樹木伐採、展望デッキの修繕等

ソフト面：生徒の利活用促進、植物名札・解説板等の整備、生徒・教職員・OB・市民・

ボランティアによる整備・清掃作業継続、平田植物園めぐりの新訂版発行・パンフレット作成配布、予算の確保等

久徴園管理基金の創設

毎年の管理経費が必要であり、久徴園管理人積立金も徐々に目減りしている。また、生徒数の減少により今後の経費の不足が懸念されている。全国的に見てもこうした規模の学校植物園を保持している学校は珍しく、卒業生の心の支えにもなっているので、久徴園整備基金を設立して安定した維持管理ができるようにしていただきたい。(平田植物園・久徴園管理委員会) 1 年間の平田植物園・久徴園管理委員会「原案作成委員会」の現地調査や計画策定があったおかげで記念事業部会のスムーズなスタートができたと思います。ただ、実行委員会の委員の多くは 40 代と 50 代の委員で、久徴園への思いは久徴園で応援歌練習や弁当を食べ級友と語り合った経験を持つ諸先輩方の思いとかなり食い違っていました。そこを埋めて久徴園の継続的な整備に対する予算獲得が大きな課題でした。池淵久徴会会長の熱い思いもあり多くの委員の同意を得ることができたのは、未来につながる明るい希望となりました。

平成 31 年 3 月開催の第 4 回実行委員会で記念事業の概算予算が承認され、また、平田植物園・久徴園管理委員会でも緊急性を要する優先的な整備内容が承認され、百周年記念式典が開催される令和 2 年 10 月までに行う第 1 期平田植物園・久徴園整備について具体的な取り組みが始まりました。令和元年 4 月開催の第 5 回実行委員会で、百周年記念寄付金の受け皿を「久徴会基金」としてくり、基金を基に事業を実施することや、基金を管理する組織を設置して検討を開始することなどが決定され募金が始まりました。

一次なる百年の人づくり・森づくり・環境づくりを皆の力でー

募金の集まり具合を見ながら、4～5 号館中庭の整備を実施することになりました。整備内容は募金額がほぼ確定した 2020 年春から検討に入ることとなり、整備内容については、最終的に平田植物園・久徴園管理委員会と記念事業部会の合同会議で決定し、実行委員会の承認を得るものとすることが決定されました。

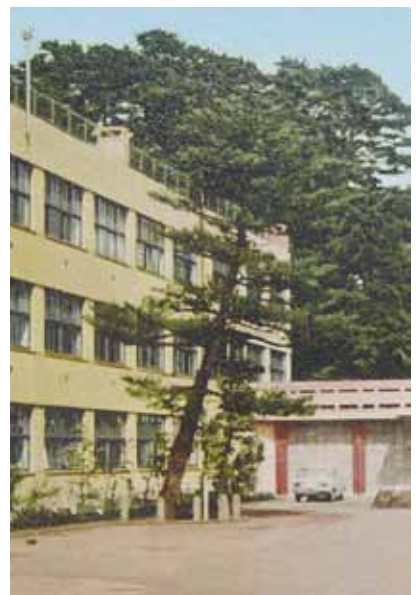
「久徴会基金」は百周年記念の年だけに設置するものではなく、今後も卒業生と学校をつなぐ新たな役割を持ち継続的に募金活動を行えることを目指しています。

令和元年 10 月に平田植物園・久徴園先行整備の現地説明会を、高所作業などを含め短期間で安全に作業ができる卒業生が関係する 2 業者を招いて開催しました。久徴園入り口付近雑木伐採、1～2 号館中庭松枝降ろし、山頂部展望台木柵修繕、久徴園入り口付近の東屋屋根修繕、久徴会館裏の大木の伐採木搬出処理を行うことにし、12 月には業者を決定しました。業者は出雲地区森林組合ですが、24 期卒業生で生物部に所属していた専務理事の金山氏に担当してもらえました。実際の作業は在校生の授業への影響を最小限とするため春休みを中心として実施することにしました。

今後、久徴会基金を活用し、運動部女子部室等の修繕、平田植物園めぐり新訂版作成、記念モニュメントの設置、4～5 号館中庭の整備、植物名札・解説板の整備等の事業を実施し、生徒達の学習環境を整備しながら次なる百年を見据えた環境整備を続けていく予定です。記念モニュメントとして「大正天皇お手植えの松」に決定し、大正天皇お手植えの松を加工し、出雲高校玄関風除室に設置することになりました。



「大正天皇お手植えの松」記念モニュメント



昭和 43 年(1968 年)頃の
大正天皇お手植えの松

平田植物園・久徴園の記録		
年代	学校記事	平田植物園・久徴園
明治36年（1903）4月	島根県女子師範学校設置	
明治37年（1904）9月		平田駒太郎教諭女子師範着任。 植物園の整備に着手。
明治40年（1907）4月	島根県立今市高等女学校が女子師範に併置、新設。	
明治41年（1908）		今市町が学校背後の山林を学校に永久貸与。
明治41年（1908）9月		女子師範校友会他から校舎南側の土地が寄付される。 今市町有志者婦人会校友会による土地の合同寄付。
明治42年（1909）10月		今市町より山林の東側高台の畑地を学校園に寄付。
大正2年（1913）9月	奥田文相が女子師範に来訪。学校園を久徴園と命名。	
大正8年（1919）1月		島根県が植物園を平田植物園と命名。 面積1600坪、植物種類800に及べり。観賞植物園・ 分類植物園・有毒植物園・薬用植物園・風致園他 時々植物園を公開し一般の縦覧を許し園芸に関し講演。
大正9年（1920）1月	大町桂月が出雲を訪れる。	桂月は平田教諭の学識と人柄に敬服。
大正9年（1920）2月		平田教諭県庁で表彰授与と奨励金年額三百円の給付。
大正9年（1920）4月	島根県立今市高等女学校が女子師範に再併設。	
大正10年（1921）8月		平田教諭49歳で病没。墓は立久恵峽の靈光寺境内。 学校では永くその功を讃え、平田植物園を永久に守る決意。
大正11年（1922）4月	大町桂月が友人を伴って出雲を訪れる。T14年病没	
大正12年（1923）4月	女子師範移転、今市高等女学校が独立校となる。	
昭和2年（1927）	平田教諭と親しかった田中熊太教諭「久徴」を揮毫	田中熊太教諭作 平田植物園二首（漢文）
昭和6年（1931）6月	茶室「無想庵」が新築落成。	
昭和9年（1934）11月		前庭に平田植物園の碑が建立（後に久徴園入口に移転）。
昭和13年（1938）1月	家庭寮（昭和18年思斎寮と命名）新築落成	
昭和15年（1940）11月	今市高女創立20周年記念式。	久徴会所有地の拡張、整地植樹。
昭和16年（1941）		平田植物園食料増産政策によって逐次畑に転換。
		専任担当者廃止。800種以上だった植物も300種に激減。
昭和20年（1945）9月		森山美具教諭、植物園の復興に精魂を傾ける。
昭和23年（1948）4月	今市高女を廃止。島根県立出雲高等学校発足。	植物数も600～700種に回復。専任担当者無し。 世相悪化で苗木は抜き取られ樹木は新となった。
昭和25年（1950）		河井通良教諭乏しい予算の中で温室を復興。
昭和28年（1953）4月		延原肇教諭、植物園復興のため平田植物園史を編纂。
昭和28年（1953）5月	吉田元吉校長他平田植物園復興後援会を結成。	植物園の復興を広く呼びかける。募金活動を開始。 一般から5万円（139名）卒業生から6万6千9百円（377名）
昭和28年（1953）7月	「出雲高校平田植物園」発行。	育種栽培の専門家、柳楽茂専任管理員を迎える。
昭和28年（1953）9月	県に再三陳情し復興補助費3万円の交付を受ける。	観賞植物園の配置転換整備・シダ植物園の補植・バラ園 の移転・ツツジ園の新設・ハギ園の復活等を手がける。
昭和29年（1954）		柳楽茂氏が非常勤講師となる。竹園・アジサイ園を新設。
昭和30年（1955）		カエデ園の新設・柳園の移転・薬草園の整備等実施。
昭和31年（1956）	「出雲高校平田植物園植物目録」（園芸班作成）	万葉植物園完成。植物種129科1300種。
昭和31年（1956）6月		生物班「砂丘植物群落の研究」・「生存競争の研究」
昭和31年（1956）9月	柳楽講師・高橋喜一郎教諭・延原肇教諭・青木勝三郎教諭と園芸部員の協力で万葉植物園完成。	
昭和32年（1957）		生物班、差海海岸でハマナス自生地発見。
昭和32年（1957）11月	生物班「サンインマイマイの研究」で第1回日本学 科学賞の全国賞を受ける。	指導者高橋教諭急逝のためカタツムリ研究途絶える。 高校の植物園としては全国有数。大学からも研究見学。
昭和32年～38年	旧校舎解体と新校舎建設 昭和32年オオサンショウウオ飼育開始	久徴園を除く植物園の配置換え。難事業であった。 36年に水生植物見本園・斑入り植物園新設。
	35年度「シダの発生研究」「シジミの変異と分布」	「サンショウウオの生態研究」「経島ウミネコ生態研究」
	この時期生物班顧問は延原肇・高橋喜一郎・中井春治・佐々木茂・山本英人・横原道夫・青木充之の各教諭	
昭和37年（1962）2月	「出雲高校平田植物園植物目録」改訂発行	目録には園芸品種も含め2055種が掲載。
		生物班45年「六ノ原植物調査記」46年「内尾谷の蝶」他
昭和46年（1971）3月	開校50周年記念水生植物園と記念園完成。	竹笹園・海浜植物園新設
昭和50年度（1975）	久徴園管理委員会設置	50年8月、22年間管理してこられた柳楽茂講師が退職
	50年9月、杉原管理員就任	森山美具教諭が植物園専任講師、丸山巖参与就任
昭和51年度		水生植物園の増設・久徴園入口の整備実施
昭和52年（1977）3月	「出雲高校平田植物園」改訂版発行	森山美具教諭・青木充之教諭
昭和52年度		中庭の一部に和風庭園完成
昭和53年（1978）3月	「平田植物園花暦」創刊	森山美具教諭・青木充之教諭
昭和55年（1980）4月	久徴会役員会で久徴園整備を決定	久徴園に遊歩道を、平田植物園に案内板を整備する案
昭和55年（1980）9月	開校60周年記念「久徴記念庭園」完成。	久徴園管理委員会規定を作成 生物班OBによる久徴園の清掃活動（継続中）

平成2年（1990）9月	開校70周年記念式典	
平成4年（1992）	久微会館建設に伴う久微園整備計画協議	
平成5年（1993）11月	思齋寮記念茶会	
平成6年（1994）11月	久微会館完成	
平成12年（2000）5月	「久微園を語る集い」開催（生物班OBと）	久微園整備計画
平成12年（2000）8月		久微園整備作業（久微会と生物班OB、生徒参加）
平成12年（2000）9月	創立80周年記念式典	「平田植物園花暦」改題「平田植物園めぐり」発行[青木充之氏(7期卒)執筆]
平成14年（2002）3・4月	久微園整備に関する協議（生物班OBと）	校舎改築に伴う校舎周辺調査（生物班OB）
平成15年（2003）3月	新校舎周辺造園基本計画作成	
平成15年（2003）	旧校舎解体と新校舎建設	出雲科学館丸山氏による久微園整備開始
平成16年（2004）1月	久微園管理委員会で大正天皇お手植えの松協議	
平成16年（2004）7月	久微会特別役員会開催	久微園整備及び平田植物園の再生・整備のための募金目標3,000万円
平成18年（2006）2月・10月	久微園整備に関するプロジェクトチーム初会合	久微園整備検討委員会14名、6回開催
平成19年（2007）4月	校舎改築に伴う環境整備事業の久微園整備完了	茶室「無想庵」撤去、山頂整備、久微会館への連絡通路新設、植物名札、万葉植物和歌名札新設
平成24年（2012）4月～		松井義巳氏が平田植物園再生に取り組む（平成29年3月まで）
平成28年（2016）8月	第98回全国高等学校野球選手権大会初出場	昭和24年（1949年）創部から68年目の甲子園
平成29年（2017）3月		「平田植物園めぐり」第4版、同DVDの発行（青木充之氏）
平成29年（2017）5月	平田植物園・久微園管理委員会（新メンバーを含め15名）	久微園整備検討委員会内に「原案作成委員会」7名を設置
平成30年（2018）10月	出雲高校創立百周年記念事業実行委員会設置	平田植物園・久微園整備検討
令和2年（2020）	創立100周年記念	平田植物園・久微園整備実施

出雲高等学校校歌
竹友藻風 作詞
長谷川良夫 作曲

一、翠色濃く鷹の澤
久微園に鳥啼きて
松吹く風のそよかなる
我等の出雲

懐きき学びの舎の友垣よ
仰け仰け正義と真実の
光あまねこの舎を

二、若葉かがよふ一の谷
麓の平野の果遠く
雲むらさきに照るにほふ
我等の出雲

美しき学びの園の友垣よ
歌へ歌へ平和と友愛の
命をなごうこの園を

これで「平田植物園めぐり」は終わりです。昔は入学すると上の広場で応援歌の練習があったり、フォークダンスをしたといひます。HRや総合学習の時間、放課後等を利用して、一度平田植物園に足を踏み入れてみませんか。この冊子を有効に利用して、久微園を可愛がっていただけるよう祈っています。

- ・「平田植物園めぐり」の製作に協力してくださった先生方
飯塚 勝 先生 / 岸 揮恵 先生 / 竹田 茂 先生 / 田中 真之 先生



- 索引 -

アオキ (青木).....23	カイツカイブキ (貝塚伊吹).....111	サンイントラノオ (山陰虎の尾).....3
アオハダ (青肌).....42	カキツバタ (杜若、燕子花).....116	サンショウバラ (山椒薔薇).....51
アカガシ (赤桎).....97	カクレミノ (隠蓑).....106	シキミ (檣、拂).....77
アカマツ (赤松).....144	カゴノキ (鹿子の木).....80	シナノガキ (信濃柿).....58
アカメガシワ (赤芽柏).....51	カシの類 (桎の類).....97	シマカンギク (島寒菊).....57
アキグミ (秋茱萸).....52	カタクリ (片栗).....19	シモクレン (紫木蓮).....101
アキチヨウジ (秋丁字).....10	カラスザンショウ (烏山椒).....43	シモバシラ (霜柱).....19
アキノキリンソウ (秋の黄輪草).....30	カラタチ (唐橘).....95	シャガ (射干).....141
アジサイ (紫陽花).....115	カラタチバナ (唐橘).....64	シュウメイギク (秋明菊).....8
アスナロ (翌檜).....110	ガマズミ (莢蒾).....36	ショウキズイセン (鍾馗水仙).....117
アズマイチゲ (東一華).....14	ガンピ (雁皮).....30	ショウブ (菖蒲).....117
アセビ (馬酔木).....131	カンボク (肝木).....141	シライトソウ (白糸草).....71
アベマキ (阿部楨).....41	キクザキイチゲ (菊咲一華 (花)).....14	シラカシ (白桎).....97
アマドコロ (甘野老).....73	キセウタ (着せ綿、被綿).....10	シラン (紫蘭).....19
アヤメ (菖蒲).....116	キソケイ (黄素薺).....53	シロダモ (白だも).....77
アラカシ (粗桎).....97	キッコウチク (亀甲竹).....13	シロバナサクラタデ (白花桜蓼).....117
アリドオシ (蟻通).....22	キツタ (フユツタ、冬蔦).....38	シロモジ (白文字).....16
アワブキ (泡吹).....79	キツネノカミソリ (狐の剃刀).....68	シロヤマブキ (白山吹).....13
イイギリ (飯桐).....50	キバナアキギリ (黄秋桐).....66	スギ (杉).....72
イカリソウ類 (碇草).....63	キブシ (木五倍子).....141	ススキ (芒、薄).....50
イズセンリョウ (伊豆千両).....74	キノセンリョウ (黄夷千両).....68	スズムシバナ (鈴虫花).....11
イヌノキ (蚊母樹).....83	キャラボク (伽羅木).....96	スダジイ (すだ椎).....40・82
イズモコバイモ (出雲小貝母).....3	キョウガノコ (京鹿ノ子).....8	ズミ (染み).....35
イタヤカエデ類 (板屋楓).....135	キョウチクトウ (夾竹桃).....127	セイヨウヒイラギ (西洋柊).....59
イチイ (一位).....96	ギョリュウ (御柳).....100	セキショウ (石菖).....117
イチョウ (銀杏).....98	キランソウ (金瘡小草).....68	センダン (梅檀).....36
イチリンソウ (一輪草).....62	キリンソウ (黄輪草).....19	ソデツ (蘇鉄).....93
イヌガシ (犬桎).....17	キンモクセイ (金木犀).....139	ソメイヨシノ (染井吉野).....32
イヌザクラ (犬桜).....34	クスノキ (楠、樟).....132	ソコゴ (戦、冬青).....80
イヌシデ (犬四手).....28	クマザサ (隈笹).....70	
イヌツゲ (犬黄楊).....135	クマノミズキ (熊野水木).....76	ダイオウショウ (大王松).....107
イヌビワ (犬枇杷).....25	クリ (栗).....40	タイサンボク (泰山木).....122
イヌブナ (犬撫).....42	クリハラン (栗葉蘭).....87	ダイセンツバツツジ (大山三葉躑躅).....134
イヌマキ (犬楨).....96	クロガネモチ (黒鉄鰯).....82	ダイダイ (代々).....136
イノデ (猪手).....86	クロキ (黒木).....36	タイリンアオイ (大輪葵).....65
イブキ (伊吹、イブキビャクシン).....111	クロバナロウバイ (黒花臘梅).....60	タニウツギ (谷空木).....15
イワガネゼンマイ (岩ヶ根蕨).....89	クロマツ (黒松).....144	タブノキ (榊).....27
イワガネソウ (岩ヶ根草).....89	クロモジ (黒文字).....33	タマリユウ (玉竜).....122
インヨウチク (陰陽竹).....121	ゲッケイジュ (月桂樹).....99	タムシバ.....141
ウツギ (空木).....68	ケヤキ (欒).....57	タラヨウ (多羅葉).....84
ウツボグサ (空穂草).....30	ゲンカイツツジ (玄界躑躅).....12	ダルマギク (達磨菊).....131
ウバユリ (姥百合).....64	コウホネ (河骨).....7	ダコンウバイ (檀香梅).....16
ウメ (梅).....105	コウヤマキ (高野楨).....112	チゴユリ (稚児百合).....73
ウメモドキ (梅擬).....104	コウヨウザン (広葉杉).....77	チシヤノキ (高荳木).....139
ウラシマソウ (浦島草).....141	コックパネウツギ (小衝羽根空木).....37	チドリノキ (千鳥の木).....20
ウラジロガシ (裏白桎).....34	コデマリ (小手毬).....137	チャルメルソウ (哨呐草).....71
ウラジロノキ (裏白の木).....26	コナラ (小楠).....28	チョウジガマズミ.....124
ウリノキ (瓜木).....24	コノテガシワ (児手柏).....52	チョウジソウ (丁字草).....9
ウリハダカエデ (瓜肌楓).....21	コハウチワカエデ (小羽団扇楓).....122	ツタ (ナツツタ、蔦).....38
ウミズザクラ (上溝桜).....35	コバノズイナ (小葉の瑞葉).....70	ツワブキ (石路).....131
エゴノキ (萵苣木).....31	コバノミツバツツジ (小葉の三葉躑躅).....134	テーダマツ.....108
エゾミソハギ (蝦夷禊萩).....11	コブシ (辛夷).....123	テイカカズラ (定家葛).....59
エノキ (榎).....58	ゴマギ (胡麻木).....142	テツカエデ (鉄楓).....76
エビネ (海老根).....9	コムラサキ (小紫).....75	ドイツズラン (独逸鈴蘭).....30
エンコウソウ (猿猴草).....6	コモチマンネングサ (子持万年草).....11	ドイツトウヒ (独逸唐檜).....109
エンレイソウ (延齡草).....43	コンギク (紺菊).....4	トウカエデ (唐楓).....140
オウレン (黄蓮).....62	ゴンズイ (権葦).....53	ドウダツツツジ (灯台躑躅).....50
オオイタビ (大木蓮子).....68		トウチク (唐竹).....120
オオイタヤメイゲツ (大板屋明月).....20	ザクロ (石榴、栲榴).....138	トウテイラン (洞庭藍).....4
オオカニコウモリ (大蟹蝙蝠).....22	サザンカ (山茶花).....133	トサミズキ (土佐水木).....15
オオバインモトソウ (大葉井の許草).....88	ザゼンソウ (座禅草).....6	トチノキ (栃の木).....81
オオバギボウシ (大葉擬宝珠).....9	サネカズラ (実葛).....67	トベラ (扉).....31
オオメノマンネングサ (大雌の万年草).....5	サラシナショウマ (晒菜升麻).....68	
オカメザサ (阿亀笹).....120	サルトリイバラ (猿捕茨).....60	ナギ (椰).....112
オガタモノキ (招霊木).....35	サルナシ (猿梨).....17	ナツズイセン (夏水仙).....60
オキノアブラギク (隠岐の油菊).....57	サワギキョウ (澤桔梗).....7	ナツツバキ (夏椿).....136
オシダ (雄羊歯).....89	サワグルミ (沢胡桃).....27	ナリヒラダケ (業平竹).....119
オニグルミ (鬼胡桃).....27	サワヒヨドリ (沢鶉、沢火取).....49	ナルコユリ (鳴子百合).....73
オウタチカンギク (乙立寒菊).....56	サワラ (榎).....110	ナワシログミ (苗代茱萸).....51
オモダカ (面高).....8	サンインギク (山陰菊).....56	ナンゴククガイソウ (南国九蓋草).....13

ニッケイ (肉桂).....	136	ヒオウギ (檜扇).....	100	ムサシアブミ (武蔵燈).....	78
ニッコウキスゲ (日光黄苔).....	48	肥後椿.....	81	ムラサキシキブ (紫式部).....	75
ニシキウツギ (二色空木).....	124	ヒサカキ (姫榊、杓).....	18	メグスリノキ (目薬の木).....	21
ニシキギ (錦木).....	101	ヒトツバタゴ (一葉たご).....	103	メタセコイア.....	61
ニリンソウ (二輪草).....	62	ヒトリシズカ (一人静).....	11	モチツツジ (繡躑躅).....	58
ヌルデ (白膠木).....	76	ヒノキ (檜、火の木).....	110	モッコク (木斛).....	55
ネグンドカエデ.....	143	ヒメカンアオイ (姫寒葵).....	65	モミ (樅).....	108
ネコノチチ (猫乳).....	79	ヒメコマツ (ゴヨウマツ、姫小松).....	94	モモ (桃).....	16
ネザサ (根笹).....	120	ヒュウガミズキ (日向水木).....	73	ヤダケ (矢竹).....	119
ネジキ (捻じ木).....	104	ヒヨクヒバ (イトヒバ、比翼檜葉).....	112	ヤツデ (八手).....	124
ネズミモチ (鼠躑).....	70	ヒヨドリバナ (火取花、鵜花).....	30	ヤブカンゾウ (藪萱草).....	47
ネムノキ (合歓の木).....	145	フシグロセンノウ (節黒仙翁).....	18	ヤブコウジ (藪柑子).....	83
ノアザミ (野薊).....	30	フジバカマ (藤袴).....	93	ヤブソテツ (藪蘇鉄).....	88
ノカンゾウ (野萱草).....	47	フタバアオイ (双葉葵).....	69	ヤブツバキ (藪椿).....	24・132
ノグelm (野胡桃).....	27	フタリシズカ (二人静).....	11	ヤブデマリ (藪手毬).....	142
ノコギリシダ (鋸羊歯).....	89	ブナ (榲).....	42	ヤブニッケイ (藪肉桂).....	26・82
ノコンギク (野紺菊).....	4	ブラシノキ.....	127	ヤブムラサキ (藪紫).....	75
ノジギク類 (野路菊).....	49	ベニシダ (紅羊歯).....	86	ヤマグルマ (山車).....	24
ノゼラン (熨斗蘭).....	57	ベニホウオウチク (紅鳳凰竹).....	121	ヤマコウバシ (山香し).....	141
ノハナショウブ (野花菖蒲).....	116	ベニワビスケ (紅佐助).....	41	ヤマザクラ (山桜).....	32
ノリウツギ (糊空木).....	140	ホウチャクソウ (宝鐸草).....	73	ヤマトアオダモ.....	142
バイカウツギ (梅花空木).....	15	ホオノキ (朴木).....	114	ヤマハッカ (山薄荷).....	10
バイモ (貝母).....	16	ボダイジュ (菩提樹).....	101	ヤマブキ (山吹).....	104
ハウチワカエデ (羽団扇楓).....	21	ホタルブクロ (螢袋).....	68	ヤマボウシ (山法師).....	122
ハコネウツギ (箱根空木).....	124	マサキ (桎、正木).....	31	ヤマモミジ (山紅葉).....	20
ハゼノキ (黄櫨木、櫨木).....	33	マテバシイ (馬刀葉椎、全手葉椎).....	41	ヤマモモ (山桃).....	127
ハチク (破竹).....	118	マユミ (真弓).....	12	ユウスゲ (夕萱).....	47
ハナカイダ (花筏).....	16	マルバアオダモ (丸葉青櫨).....	142	ユキグニミツバツツジ (雪国三葉躑躅).....	134
ハナカイドウ (花海棠).....	100	マルバウツギ (丸葉空木).....	60	ユキノシタ.....	70
ハナショウブ (花菖蒲).....	116	マンサク (満作).....	102	ユキワリイチゲ (雪割一華).....	14
ハナツクバネウツギ (花衝羽根空木).....	141	ミズバショウ (水芭蕉).....	7	ユズリハ (譲り葉).....	133
ハナミズキ (花水木).....	52	ミチノクフクジュソウ (陸奥福寿草日花).....	12	ヨコグラノキ (横倉の木).....	140
ハマカンゾウ (浜萱草).....	48	ミツガシワ (三榲).....	6	ラカンマキ (羅漢槿).....	96
ハマナス (浜梨).....	55	ミツデカエデ (三手楓).....	135	ラクウショウ (落羽松).....	111
ハマナデシコ (浜撫子).....	55	ミツバウツギ (三葉空木).....	43	リュウキュウチク (琉球竹).....	119
ハマビワ (浜枇杷).....	40	ミツマタ (三榎、三叉).....	71	リュウノウギク (竜腦菊).....	49
ハマユウ (浜木綿).....	48	ミヤコアオイ (都葵).....	65	リョウブ (令法).....	80
ハリエンジュ (針槐).....	126	ミヤマカタバミ (深山傍食).....	64	リョウメンシダ (両面羊歯).....	88
バリバリノキ.....	18	ミヤマガマズミ.....	138	ロウバイ (蝟梅).....	102
ハンノキ (榛の木).....	30	ミヤマヨメナ (深山嫁菜).....	70	ワレモコウ (吾木香、吾亦紅、割木瓜).....	53
ヒラギ (栂).....	126	ムクノキ (椋木).....	34		

出雲高等学校と平田植物園について

1. 平田植物園とは.....	1
2. 山頂広場について.....	29
3. 思斎寮から久徴会館へ.....	54
4. 無想庵について.....	67
5. 東屋のこと.....	74
6. 大正天皇お手植えの松.....	94
7. 「久徴」の碑文について.....	99
8. 島根県女子師範学校跡碑と平田植物園碑.....	102
9. 柳楽 茂氏のこと.....	103
10. 平田駒太郎記念庭園.....	107
11. 丸山 巖氏のこと.....	114
12. 竹笹園について.....	118
13. プール跡地.....	123
14. 吉田校長の碑について.....	125
15. 4～5号館中庭.....	138
16. 「松の木は残った」.....	143

コラム

● 花の色が赤や青や黄色等と多彩なわけ.....	5
● ヒトリシズカ / 一人静.....	11
● 種子の拡散攻略 / エライオソーム.....	19
● 離ればなれになった植物.....	23
● イヌビワの巧みな戦術.....	25
● テイカカズラと悲恋.....	59
● 変な名前の植物.....	63
● キバナアキギリの巧妙なしくみ.....	66
● 家紋.....	69
● テンナンショウ類の性転換.....	78
● シダ植物とは.....	87
● イチョウの黄葉はどうして起こるのか?.....	98
● 学名について.....	105
● オオサンショウウオのこと.....	106
● マツ葉のおはなし.....	109
● 右巻き、左巻き.....	113
● 竹と笹はどこが違うのか?.....	121
● イとリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ.....	133
● 子孫繁栄の手段.....	137

あ と が き

私が平田植物園・久徴園に関わらせていただいたから半世紀になる。植物園の管理、運営はもちろんのこと、広報活動にも力を注いで来たつもりだ。

昭和 51(1978) 年に、生徒達や先生方に平田植物園の草花を知ってもらおうと「花暦」の企画を始めた。当時の植物園専任講師の森山美具先生と私が分担して、最初は手書きのガリ版刷りで四月から月毎に 10 ～ 15 種の草花の図入り解説を印刷し配布した。これが意外と好評で、次の年に年間の花暦を冊子「花暦」にして発刊した。2 ～ 3 年に一度改訂を施し、山本 廣先生執筆のシダ編も加えて平成 6(1994) 年の改訂六版まで作られた。

平成 12(2000) 年、出雲高校創立 80 周年を期に当時の福間利行久徴会会長の発案で、「花暦」改め「平田植物園めぐり」が刊行された。私が全篇執筆し、レイアウトもした原案を印刷屋に出稿して印刷・製本してもらった。これは、平成 27(2015) 年度まで入学時に生徒全員に配布された。平成 29(2017) 年度からは、全篇デジタル化し、学校ホームページに掲載すると共に DVD も作られた。

今年、大きな節目となる創立 100 周年を迎えるに当たり、真玉保浩校長、池淵俊雄久徴会会長の下、新訂版「平田植物園めぐり」を作ることとなった。田中和彦久徴園管理委員会委員提起の未来“百年の森”構想をコンセプトに新訂を試みた。従来のもぐりを基本に、県内に生育する馴染み深い植物を追加、種類数も 320 種に増やした。専門用語を図と脚注で説明し、随筆も一変し、コラムを増やして読み応えのあるようにした。又、久徴園に咲く四季折々の花をふんだんに写真で紹介し、“山の学校”時代の古き記念写真も随所に挿入して卒業生との思い出の絆とした。

執筆は、写真も含めて大方を私が担当したが、キク類、竹筴類、シダ類は、本校生物教諭の柳浦正夫先生に書いてもらい、監修もしてもらって精度を深めた。また、原稿のレイアウトは、本校校務技術員の青木博志さんに、過去の経験を活かして作成してもらい、二年の歳月をかけて見事な出版物ができあがった。

この冊子を手元に、平田植物園の生きた植物や環境を堪能して欲しい。

平田植物園は、全国でも類い希なる学校植物園である。この 100 年の間に、度々の荒廃や園の危機を迎えたが、理解ある校長先生、先輩生物教師、生物班、柳楽 茂氏を始めとする園丁さんの献身的ご尽力により、今日の園があることを肝に銘じ、向こう 100 年の森の発展を夢見つゝあとがきとする。